「満洲」における心理学
—前半期における人物を中心として—

小野谷 邦 子

はじめに

かつて日本人が「満洲」と呼んでいた地があった。中国の東北地方をさしていて、もともと満洲族が住んでいる土地という意味でそう呼ぶようになった。中国人は、その地を古くは東北三省、または東三省と呼んでおり、現在では東北地方、東北地区という名前を使っている。「満洲」「満洲国」という呼称は、ある時期の日本人の認識を反映しており、日本の植民地支配と深くかかわって使われてきたものである。ここではあくまでその歴史的事態を負った言葉として、「満洲」「満洲国」という呼称を使うこととする。

1932（昭和7）年に設立した「満洲国」の面積は、「現在の日本本土の約3.4倍、他の植民地との比較では、台湾の約36.2倍、朝鮮の約5.6倍という広大なものである。またその人口からみると、敗戦時には「軍隊を除く在住一般日本人は、「満州国」と「関東州」をあわせて約155万人、当時の日本国民約52.3人に1人」①にまでのばったが、それでも「満州国」「関東州」全体に占める人口比率は約2パーセント強にすぎない。ちなみに他の植民地在住日本人は、台湾が約35万人、朝鮮は約70万人であった。それだけでなく、「満州」というと今日でこそ辺境の地のようにイメージされているが、位置的にそこは、ヨーロッパに開かれた国際的要地でもあった。当時日本からヨーロッパに行くには汽船で行くか「満洲」を経てシベリア経由で汽車で行くしかなかったが、汽車でいけば船で行く3分の1の日数と3分の1の経費でいくことができた②のである。その広さと資源、土地の地理的条件、「満蒙は日本の生命線」といわれた所以である。戦前の日本のを考えるうえで、「満洲」はきわめて重要な意味がある。

1905（明治38）年、日露戦争に日本が勝利し、その代償として、ロシアが清国から租借していた遼東半島南端の「関東州」とロシアが経営していた東清鉄道の一部を獲得した。それが、シベリア鉄道に結ぶ鉄道であり、その経営のためとしてつくられたのが南満洲鉄道株式会社（通称「満鉄」以下満鉄と略記）であった。これによって、日本は満州植民地化の有力な手がかりを得、以後多くの日本人が渡満していった。

このように日本の近現代を考える上で重要な位置にある「満洲」の、そこにおける心理学は日本の心理学を考える上でも重要性をもつ。その時期の「満洲」における心理学、つまり一定の時代のその地を根として展開された日本の心理学（者）のたたした役割と意義を探るために、その第一歩として、今回どのような人物がそこで活動したのか、またその所属していた機関の性格を明らかにすることにしばって報告することにする。
1. 「満洲」における心理学関係者

いつどのように分野でどのような人物が「満洲」で活躍したのか、まずは把握しておきたい。

心理学関係者が「満洲」に渡るのは、日露戦争後10年以上経ってからであった。一般の日本人が家族を伴って「満洲」にひとり住むようになってはじめて、教育現場、その他官公署や企業等の職場に心理学徒が必要とされるようになってきたということであろう。その頃から、いわゆる「満洲事変」（1931年）までを第一期とし、1932（昭和7）年の「満洲国」建設後、独立の本格的な転換期に進んだ。日中戦争突入（1937年）までを第二期、あからさまな軍国主義をしつこく押し進めて、「満洲」なる地が消滅した日本の敗戦（1945年）までを第三期と区分して見ていこう。この時期区分は「満洲」における日本の関わりの展開と関係すると同時に、当然のことながら日本におけるファシズムの進展の時期とも重なりあう。

ここで、心理学関係者としてとりあげるのは、この時期に「満洲」関連機関にその職業所属があって、1942（昭和17）年に設立された満洲心理学会の会員および主として心理学を専攻して大学等を卒業した人物や心理学関連の業績のある人とした。現時点でいつかかた引きと遺骨の氏名とその所属機関およびごく簡単な履歴を記したものが表1である。満洲心理学会会員についてはそのアイデンティティが心理学にあると考えられる。しかし、研究業績が心理学に関連したものであるかどうかの評価には、異論もあるところであろう。また、心理学を専攻して大学等を卒業しても、その後の活躍分野がちがっている人物をどう捉えるかについても問題がある。このリストでは名前を入れたが、前者の例には上村哲弥が、後者としては松沼昭、秋川武治などが考えられるところである。

第一期は福富一郎、朝日直樹、黒田源次等、「満洲」の心理学界を語るのに欠かせない人物がこの期に渡りしていること、そして、それらの人たちがすべて満鉄関係機関に所属していることに気づく。また京都帝国大学出身者であることが目をひく。

第二期には、満鉄関係の南満洲工業専門学校や満鉄教育研究所に加えて、各地の高等学校、師範学校、中学校等の教員、さらに満州国の設立にともなって満州国官吏がいたている。したがって、帝国大学出に加えて、日本国内の師範学校や高等学校、文理科大学出身者があまり、ひろがりをみせていている。

第三期は、何といっても帝国大学の心理学者4人の存在とその人たちによる満洲心理学会の設立によって、国民学校や陸軍軍官学校の教員から、満州国、各種地方官吏、さらに民間会社、満鉄能率協会や満日文化協会等、それまで見えなかった分野にまで多様化してきている。この時期は、満鉄の経営の悪化によって満鉄関係の教育機関がかなりその権限を他に移譲したこと、および満鉄と関東軍との覇権争いが、満州国の建国に決着を示すことを反映して、その所属機関の拡散がみられる。高等学校機関にしても、満鉄関連から、帝国大学をはじめ、奉天工業大学、新京法政大学等、満洲国立の大学にその勢力分野が移ってきている。このように、心理学関係者の所属をみるとだけでも、社会情勢の変遷を的確に反映している。また、一見してわかるように、心理学関係者のほとんどが、中等教育から高等教育さらに教育関係官公署など教育関係の分野で活動していたといだら
表1 渡満期・所属機関別 主な「満洲」心理学関係者名簿

<table>
<thead>
<tr>
<th>期</th>
<th>氏名</th>
<th>年度</th>
<th>住所・機関名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>杉本 純</td>
<td>1911</td>
<td>東京帝大心理部</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1913</td>
<td>九州帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1915</td>
<td>北海道帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1917</td>
<td>福島帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1919</td>
<td>札幌帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1921</td>
<td>東北帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1923</td>
<td>岩手帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1925</td>
<td>青森帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1927</td>
<td>秋田帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1929</td>
<td>仙台帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1931</td>
<td>弘前帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1933</td>
<td>仙台帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1935</td>
<td>岩手帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1937</td>
<td>福島帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1939</td>
<td>秋田帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1941</td>
<td>青森帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1943</td>
<td>仙台帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1945</td>
<td>岩手帝大心理部</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（上記 氏名順の*印は満洲心理学会員）
う。そこで次節で、まず「満洲」における教育事業についてとりあげる。

その所属機関を見ると、渡邉時期の第一期から第二期のはじめにかけて、満鉄大連図書館、満鉄教育研究所、満洲教育専門学校、満洲医科大学、満洲工業専門学校、等々と並んでいる。先にも触れたように、これらはすべて満鉄の教育関係機関である。「満洲」における心理学者の活動も、この満鉄の教育事業と引きはなして考えられない。そこで次いで、満鉄の教育事業について、そして上記にあたる教育機関がどのような性格をもったものだったのか見ておきたい。

ところで、柿沼信と上村哲弥が渡邉した1919（大正8）年という時期であるが、満鉄関係によって、したがって極地勤務において或る意味をもつ年代であった。戦前の「満洲」に君臨した極地会社に、満鉄調査部という一大知的書類が創出されたことはよく知られている。昭和にはいると、そこに帝国大学出の秀才でも並ばずもので採用されるなくなるのだが、その帝大卒が最初に入社したのが実にこの1919（大正8）年という年であるという。

そこで、この頃から本格的にこの「知の集団」が形成されはじめたと考えてよい。その活動の根拠が充実した図書館の存在である。1907（明治40）年冬季の満鉄調査部に図書室として設けられたのが最初であるが、1918（大正7）年の調査部の機関改革に伴って、その図書館が整備され、同年冬季図書館が竣工し翌年開館の運びとなった。その初代館長になった小村孝三郎、東京都立比谷図書館にいた柿沼が引き抜かれたというわけである。心理学関係者、満洲にその活動の場を展開はじめたのは他の学問分野に比べて決して遅かったわけではない。

2. 「満洲」における教育事業

のちの京都大学教授福富一郎は、満鉄教育研究所講師として渡邉し、「満洲」における当時の教育事業について論文を残している。それを中心に、主に1920（大正9）年時の「満洲」の教育事情を紹介していくことにする。

彼は、「満洲」における教育をその経営母体から見て、民衆および民衆の経営するもの、欧米キリスト教会の経営するもの、日本および日本人の経営するものの三種類に分けて見ていく。

民衆および民衆の経営の教育は、域内外、鎮、村、堡、屯などという地域分けの多くに「小学校」があり、やや人口の多い場所には、それより上級の、当時の日本の高等小学校および乙種程度の実業学校に相当する学校によって行われていた。また、県の域内には、中学校、女学校、甲種程度の実業学校が設けられ、吉林、奉天等省轄所在地には師範学校および高等専門学校が設置されていた。これらは中央政府の管轄下にあったが、それ以外に、各鎮、村、堡、屯に、書房といわれる私塾が教育を担っていた。

欧米人経営の教育事業は、すべてキリスト教系の学校だったという。長春、吉林、鐵嶺、奉天、蓋平、遼陽、海城、大石橋、安東などに初等程度の、奉天、遼陽、營口などに中等程度の、さらに奉天には高等程度のミッション・スクールが経営されていた。他に盲啞院が奉天に、養老院および孤児院が遼陽に設けられていた。これらはその経営する病院とともに、「宗教に力を取りつ」民国人にあたえる影響は根強いものがあったという。

日本および日本人の経営としては、さらに、（1）関東監の経営するもの、（2）居留民の
経営するもの、(3) 東洋協会の経営するもの、および(4) 満鉄の経営するものの 4 種に区分される。関東州内の教育は主として関東管の施設（いわゆる公立）であって、日本人の子どものためには、小学校、高等女学校、中学校を、民人のために公学堂、公立普通学堂、および旅順師範学堂を、日中両国人のための高等専門教育として旅順工科学堂を経営している。

居留民団の経営になるものは 1920（大正 9）年時点では営口尋常小学校一校だけであった。満鉄がその経営を開始した 1927（明治 40）年の 10 月に居留民団を廃止するとともに、その経営していた小中教育の事業を発足してきている。東洋協会経営というのは、大連における商業学校、旅順における語学校である。ある種の私立学校と考えられる。

経営を開始してから 13 年を経たこの時点で、満鉄は在留邦人のために小学校 22、実業補習学校 31、実科女学校 10、中学校 1、工業学校 1、幼稚園 14 をもち、中国人のために公学堂 8、日語学堂 3、実業学校 1 を設けている。さらに日中両国人を共に収容する高等専門教育として日滿学校がある。また社会教育に関わる施設として、簡易図書館 18、巡回書庫付所 14 があげられる。そして、これらすべての教育事業一般の調査研究、教科書と教授参考書の編集、および教員の養成も研究指導の機関として教育研究所が位置づけていた。しかし、研究所の体制はいまだ整備されていなく、ほとんど現職教員の講習に手いっぱいの状況であった。

これとは別に、研究教育団体としてはすでに、1909（明治 42）年 8 月 5 日に設立された南満洲教育会（南満教育会）があった。関東庁長官を会長とし満鉄社長と顧問とするこの会は、教育行政に強力な発言力を持っていいただけでなく、教育の内容や方法についても、教員である教員を組織して多様な研究活動を展開していた。1912（大正 1）年頃から関東会報「南満教育」を発刊し、「満洲」教育界に広く読まれていた。

その「南満教育」には心理学関係と思われる論文をもつことができる。いくつか示すと、たとえば、教育学者細川幸之助⑧は 1914（大正 3）年頃に連続して次のような論文を発表している。

「神経質の児童について（1）、（2）」第 38 号、第 39 号 1914 年 2 月、3 月
「幼稚園に適用せられるプロセクト・メソッド第 40 号 1914 年 4 月
「プロセクト・メソッド批評の規準」第 41 号 1914 年 6 月
「プロセクト・メソッドに関する問題二三」第 42 号 1914 年 7 月
その他にも、知能検査関係の論文を発表している秋山真造⑨のもの、京城帝大教授の松月秀雄のものが掲載されている。秋山には、
「知能検査に関する諸問題（1）、（2）」第 42 号、43 号 1924 年 7 月、8 月
「知能測定と教育上の民主主義（1）」第 48 号 1925 年 3 月
が、また松月秀雄には、たとえば以下のようなものがある。
「智能測定の心理学的考え方と普通教授法」第 37 号 1924 年 1 月
「現代医学における心理学（1）、（2）」第 41 号、42 号 1924 年 6 月、7 月
「創造の心理（1）～（4）」第 42 号～第 45 号 1924 年 7 月～11 月
これらは、内地であっても発表されるものであり、「満洲」在住の研究者だからこそできたというなんかの特色があるというわけではない。
３．満鉄の教育事業

満鉄はその資本の半分は日本政府出資の半官半民の会社である。1906（明治39）年の会社設立から第二次世界大戦における日本の敗戦まで存続し、日本最大の株式会社として、「満洲」の重要産業を押さえ、鉄道沿線に附属地という「顧土」をもって、侵略と支配のための土台となった機関である。その事業には、大別すれば、鉄道業とそれに付随するホテルや倉庫の経営、鉄道附属地の経営、炭坑と製鉄所の経営、大連港の経営と海運業、理工・農学の研究開発、経済政策の立案、各級の教育等があった。このような多くの権益をもつ機関は、政府の代行機関ともいうべき国策会社でなければならないという理由で、かなりの行政権があったのである。

満鉄の教育事業は、満鉄設立時に日本政府が出した「鉄道及び付帯事業ノ用地内ニ於ケル土木・教育・衛生等ニ関シ必要ナル施設ヲ為スヘシ」（第五条）という「命令書」にもとづいて展開されている。ここでは附属地における土木建設、教育、衛生などの住民サービスをうたっている。特に初等教育の実施は、その「命令書」に則った鉄道附属地経営（支配）のための重要な事業のひとつであった。日本国内と同等同質の教育を施すことを目的としていた。これらとして初等教育とそれに従事する教育者のための教育研究を目的として奉天に設置されたのが教育研究所である。さらに満鉄独自の事業として、専門教育を施すことを中心とした中等・高等教育のための各種の学校経営がおこなわれた。また附属地の主要な都市には病院・医師や図書館などが設けられ、経営されていく。

中等教育は普通教育と専門教育に分けられるが、普通教育については、1919（大正8）年奉天中学校が設立されたのが最初で、これ以後中学校・女学校が増えていく。第二期以降に普通教育としての中等教育機関にも心理学関係者の職域がひろがっていくわけである。他方中等専門教育については、中堅技術者の養成目的として1912（明治45）年に満鉄が大連に設立したのが南満洲工業学校で、土木・建築・電気・機械・採鉱の5学科からなり、満鉄の事業そのものに直結している。高等教育機関として満鉄が最初に設けたのは、医師の養成目的とした南満医学堂であった。1911（明治44）年、すでに開院していった満鉄奉天医院と連携するかたちで奉天医院の隣地に開設された。当時、中国全土にわたって医師が不足しており、医療の充実は支配・被支配の関係を超えて必要なものであった。その後、南満医学堂は、1922（大正11）年に満洲医科大学に改組され、満鉄が経営する唯一の大学となった。今日でも中国医科大学として中国有数の規模とレベルを誇っている。

その他の高等教育機関としては、1922（大正11）年に南満洲工業学校を改組してできた南満洲工業専門学校と、1924（大正13）年に開設された満洲教育専門学校がある。後者は
教育研究所と密接な関係をもっており、後に述べるように特色のある教員養成校であった。また南満洲工業学校が中堅技術者の養成に主眼を置いていたのに対し、南満洲工業専門学校は高級技術者の養成を目的としていた。

満鉄経営の教育機関は、1937（昭和12）年4月末現在の満鉄附属教育機関は、小学校128、幼稚園37、中学校17、青年学校26、実業補習学校7、職業学校4、工業専門学校1、医科大学1、教育研究所1、「鮮」人普通学校19、「満」人初等学校28、「満」人中等学校1、日本語学校5を数えた。1920（大正9）年時点（P.165を参照）に比べて、日本人のための学校数は80から221へ、中国人のための学校数は12から53に増え、そのうち小学校はなくなり5.8倍に増加した。しかし、満洲医科大学と南満洲工業専門学校その他の、日本の特殊なものを除き、満鉄附属地行政権の移譲調整に伴い、1937（昭和12）年12月1日をもって「満洲国」もしくは在満日本官庁に移管されていた。

4. 満鉄教育研究所と石川七三二

「はじめ満鉄には教員養成機関はなく、現職教育によって中国人教育担当教員を補充していた。……しかし、それだけでは不十分なために、内地の師範学校卒業生や現地の書房の中国人教員に多様の教育を施して中国人教育を担当させるようになった」10）。それが教育研究所のもとになる教員講習所である。1913（大正2）年4月に大連に開設された。中国に関する専門的な知識を教員がもっとことの必要性を感じてつくられたものであり、幹部教員の養成を考えていった。さらに講習を受けた教員を軸にして「附属地」の教育の改善を図ろうとしたものである。教員講習所は、寄宿舎を備え、生徒には月々の手当て、入所旅費および修学旅行費が支給されるという好条件の上で、満鉄附属の日本人教員のなかから選抜して国語、中国事情および日本語教授法などを講習する甲科と、満鉄附属の中国人教員から選抜して日本語および各科教授法を講習する乙科があり、いずれも講習期間は1年間であった。1915（大正4）年4月にこの教員講習所の機構を改革して教育研究所と改称した。その後、日本人教育に従事する所属教員を対象とする小学校教育部講習と、「支那」人教育講習に二分し、それぞれ定員10から15人からなる短期（100日間）講習が加わったり、教員が各自の実際的教育テーマをもって特定の講師の指導によって研究するコースや、研究所が計画した調査事業を沿線教員とともに推進するための予備的講習を行なうようなコースを含め、講習は多様化していく。しかし必ずしも当初のねらいにたいして十分に機能したとはいえなかったようである。

1924（大正13）年9月満洲教育専門学校の設立にともなって、1926（大正15）年4月、教育研究所は教員養成の業務を同校に移転してその附属教育研究所となり、在職教員の長期講習と教育に関する研究を担当するようになる。1933（昭和8）年満洲教育専門学校が廃校されることにともなって、独立の研究所にとり、1935（昭和10）年8月には教育参考館が設けられ、1937（昭和12）年11月まで存続した。先に述べたように満鉄附属地行政権の移譲に関与して廃止されたのである。いうまでもなく、24年間あまりにわたって、満鉄附属地の教育現場を指導する役割と同時に、その教育の内容や方法の研究を進めめる役割を担った機関であった。

こうした事業のなかで心理学関係者が担当したであろうものは次のような科目であっ
た。1年間の養成科の学科課程のなかには、共通科目として、「時数4」の「教育心理および教育実習」が置かれていて、その編成には、教育思潮、制度、植民教育事情等および精神検査・教育測定その他実験心理に関する事項となっている。ここに見られる限り、教育心理は検査・測定であり、それ以外は実験心理という認識であった。また、講師の指導の下に研究する選択科目のなかにも「時数5」の「教育および心理」という科目が設けてある。さらに1918（大正7）年度には教育事業一般の科学的調査および研究、教科書および教授参考書の編纂などの事業が加わり、これを担当するものを教育調査部と称した。そこでの業務として、

(1) 深倉、民国およびシベリアにおける邦人および外人子弟に適切な学校教育制度、施設およびその他の系統の調査
(2) 深倉における各種学校に適切な教材および資料の調査
(3) 教育教授の心理学的基礎および教授における各種能率の調査研究
(4) 深倉における児童身体発育の調査
(5) 植民地における社会文化的の機宜に適した施設の調査

があり、(3)の心理学的研究の内容としては、

イ 邑人児童と民国人児童との心理的比較
ロ 気候風土の変化と児童精神発育状態との関係
ハ 気候風土の変化と精神的疲労との関係
ニ 植民地における社会的環境と児童精神状態との関係
ホ 各科教授並びに学習の心理学的基礎
ヘ 教師採用並びに分配の科学的基礎、等

が挙げられている(11)。そこで求められたのは、主として植民地における日本児童の教育のために必要な心理学的資料の提供であり、それはまた能率という観点からの調査研究であった。

初期に見だせる実際の活動は、児童の個人差に基づいた教育実施が必要との見地から、1923（大正11）年8月久保良英を招いて「精神検査」の指導を受け、満鉄初等教育研究会第一部に知能測定委員会を設けたことである。そしてビネー（Binet.A.）の智能テストを日本児童に即して翻案した久保式団体知能検査法A式・B式を改定して、満鉄沿線の小学校尋常3年生以上の児童に実施し、その整理委員会を作って70ページの報告書を出し切っている（1924年満鉄学務課発行）。

満鉄教育研究所専任の心理学研究者としては、在籍した年代の早い順に福富一郎、朝日直樹、石川七五三二の名をあげることができる。福富一郎は、1920（大正9）年現在、研究所に所属していたが、ほどなく京師範学校教諭として朝鮮に転出する。そして再び「満洲」に戻ってきた1939（昭和14）年には中央師道訓練所長としてであり、同年帝国大学大学教授となっている。朝日直樹は1925（大正14）年8月満洲教育専門学校教授として渡満し、1929（昭和4）年4月30日から1934（昭和9）年10月31日まで研究所講師を兼任しているが、その後は奉天鉄路総局人事課に移籍する。石川七五三二は1934（昭和9）年8月13日から教育研究所講師となり、1937（昭和12）年12月同研究所が閉所されると奉天朝日高等女学校教諭となるが、間もなく帰国して、1944（昭和19）年には東京文理科大
学研究を終了し、同大学心理学研究室助手兼教育相談部員となっている。したがって、
石川は研究所の昭和3年にあたり、3年あまりの期間でしかなかったが、注目すべき仕事を残
しているし、そのアイデンティティからしても、満鉄教育研究所の心理学者について語る
なら石川ということになるだろう。福富は建国大学のところで、朝日は満洲教育専門学校
のところでとりあげることにする。

石川七五三二は1899（明治30）年10月20日、青森県に生まれ、1925（大正15）年東
京高等師範学校の専攻科を卒業した。その際の卒業論文は「性格の心理学的研究」であっ
た。1928（昭和3）年、愛知県立児童研究所の技師となり、1932（昭和7）年現在名古屋
教育研究所長を務め、そして、1934（昭和9）年8月13日から教育研究所講師となった
わけである。先にも述べたように敗戦を待たずに日本にもどり、東京文化大を終了後、
1945（昭和20）年には東京女子美術専門学校教授に、1950（昭和25）年、山梨大学教授
に就任する。この間、1949（昭和24）年には新教育研究所を主宰している。1973（昭和48）
年3月逝去、享年73歳であった。児童心理学および心理検査法を専門にし、日本応
用心理学学会の名誉会員になっている。

教育研究所在任時石川は、精力的に満鉄教育研究所の実験学校や満鉄附属小学校児
童を対象にテスト調査し、その結果と日本在住児童の同テストの結果とを、また渡満期年
令別の比較研究をしている。これらを下記のように、研究所の研究要報に報告している。
これらは「満洲」にあったからこそ実行できた調査研究といえよう。

「興味型より観たる在満日本児童の個性的特色」研究要報第6輯 1935年
「在満日本児童の智能的特質（第一報）」研究要報第8輯 1936年
「在満日本児童の情的的特質（第一報）」研究要報第9輯 1936年
「在満日本児童の智能的特質（第二報）」研究要報第11輯 1937年
「在満日本児童の情的的特質（第二報）」研究要報第12輯 1937年
「情的テストの結果より観たる在満日本児童の個性的特色」応用心理研究第4巻第2号
1936年 pp.44-48

満鉄附属学校には中国人、朝鮮人等の児童もいたのであるが、日本の児童のみを対象
とした調査である点は注意をひく。

また、同教育研究所は「教育的経験の動静と教育活動の実際を展望し、その研究企画
を相互に交換し、連絡協調を緊密ならしむる」とために、月刊「満鉄教育たより」を発刊
した。それは1934（昭和9）年9月30日発行の創刊号から満鉄附属学校の教育行政の移
譲によって、1937（昭和12）年12月15日の第39号までで終刊となる。同研究所の研究
機能は従来、組織的なものであるといよりむしろ所員の個人的な研究に頼っている傾向
があり、満州教育専門学校の附属研究所であった時点では、その挙げられた業務課題に
もかかわらず、活発に活動を展開するまではいたらなかったようである。しかし1933
（昭和8）年満鉄独自の教育を追求する機関として再出発するにあたって、研究所の機関誌
として「満鉄教育たより」が発行されるようになったのである。石川はちょうどこのような
時期に赴任し、その創刊号から1935（昭和10）年5月発行の第9号までの編集の任に
あたっている。研究所に入所してただちにとりかかった仕事であり、同誌の性格の路線を
敷いた。教員の教育や教育研究会・研究活動の報告、「満洲」や日本、欧米の教育事情の
報告、教科や教育に関する論文など、さまざまな問題が論じられている。石川自身も、初等教育研究会で行った「心理学の教育的指針」という講話（1934年8月24日）、「我が国心理学会の一展覧」と題して日本心理学会第5回大会の動向（第10号1935年6月）、「心理学」（丸山美二著、藤井書店）の新刊紹介（第11号1935年7月）、「蒙古の旅に誘の民を偲ぶ」（17号1936年1月）、「日本応用心理学会展望」（第22号1936年6月）などを同誌に執筆しており、その活発な活動をたどることができる。さらに、奉天教育会主催で、当時東京文理学科教授の田中寛一を招いて「現代教育の動向」という講演を1935（昭和10）年5月15日に奉天常日小学校講堂において行っているが、田中の招聘に石川が力をつくしたと考えられる。それに加え、意欲的に上記の研究を行っていることを考えあわせると、教育研究所の最終期においてはあったが石川の力の大きいものがあったと思われる。

5. 満洲教育専門学校と朝日直樹

満洲教育専門学校は、満鉄教育研究所の沿革で触れられたように、1924（大正13）年9月1日に開校され、1933（昭和8）年から教育の教員が容易になったことと昭和初期の不景気によって廃校のうちめにあった。中学卒業後3年間の課程で教員資格がとれる。日本最初の専門学校令による初等教員養成専門の機関であったが、わずか9年間存在しただけだった。その間に江原に送り出した卒業生は231名にすぎなかった。しかしわめてユニークな教員養成校だったといわれている。卒業生であった四方幸三氏は「満鉄は金をかけて、人数はつった40人しか募集しない。3年間せいたくんな生活させて、勉強させてくれた。師範学校といえばとかく陰気さくさく、かたくるらしい学校です。ここはすごく明るくブルート・フェロウというのですか、実に明るい、学生が生き生きして、私は驚異でした。」13)と言う。当時教員養成の師範学校は授業料は国庫負担で、全員住校生活、多少の小遣い金も支給された。この専門学校もその点は同様であった。卒業生にどのようにいわせるとこの学校はどんな学校だったのであろうか、そしてなぜこのような学校がつくられたのであろうか。

「第一次大戦後の好況のなかで、満鉄がそれまで各県に推薦を依頼して採用していた教員の志願者が減少し需要を満たさなくなったので、自ら教員養成に着手することとしたとき、当時の学務課長側面内が、師範型教師からの脱却を標榜して関係当局を説得し、苦心して発足させたのがこの教育専門学校である。そしてが戦前において唯一の国家権力によってない教員養成校であったし、その内容も自由主義的色彩が強かった」という。その保々が1927（昭和2）年11月16日、満鉄地方部長本務と同時に初代の校長を兼務して、1929（昭和4）年公布で創設されたが、保々は師範学校を造営して、附属小学校は尋常科6学年及び高等科1学年、補助学級、複式学級を設けている（在籍児童438人）。

そこで朝日直樹について述べておこう。彼は1888（明治21）年2月1日に石川県に生まれ、1916（大正5）年「想像について」と題する論文を書いて京都帝国大学の心理を卒
業した心理学者で、大阪児童相談所、梅花女子専門学校を経て、1925（大正14）年、開設されて2年目の満洲教育専門学校教授として赴任する。ここでは、心理・哲学を担当している。日本国内からの教師確保が容易になってきて、教員養成というこの学校の任務がほぼ終わる頃、1931（昭和6）年から1933（昭和8）年にかけてアメリカ、ドイツに留学した。帰国後、ちょうど同校が閉校となったことで、4月にはそれまで講師を兼務してきた満鉄教育研究所に移るが、同年7月には奉天鉄路総局と兼務し、奉天青年学校にも教諭として関係する。翌1934（昭和9）年には教育研究所を辞して鉄路総局人事課に参事として勤務することになる。満鉄職員の採用および配置のための適性検査に従事した。「総局本務となっているのは鉄道の画期的拡張時代であったから、採用につく採用で、私の関係した採用が、満人5,000名、日人1,700名、従って試験をしたのが55,000名以上であり、且つ採用に当たって現在に可能なだけ適性検査を適用した。当時日曜日でも本当に休みとなったのは平均二カ月に一度もあったろうか[50]と生き生きと語っている。1938（昭和13）年には奉天鉄路学院に転じ副学院長となった。37歳から57歳までの20年間、働き盛りを満鉄関係機関で過ごしたことになるが、教育関係の仕事より鉄道関係の仕事の方にやる甲斐を見いだしていたようである[50]。特色ある学校も、卒業生たちの恩情にかかつねらず、朝日にとっては、鉄道の仕事にかつなものではなかったらしい。しかし、他の心理学的研究業績を挙げておくことも意味がある。この時期を中心としてその主なものをあげておく。
「気付かざる感覚と判断錯誤」『心理研究』第52号 1916 年 pp.417-424
「想像に就いての研究 (1) ～(3)」『学校教育』第39号～44号 1917年（卒業論文をまとめて出したもの）
「形態心理学に就いて」『南満教育』第59号 1926年
「ベスタロッチに於ける直観に就いての考察」『南満教育』第70号 1927年
翻訳書・ウッドウォーフス『行動主義心理学』中文館 1927年
「中日児童の智能の比較」『満洲教育専門学校研究報告』第1輯 1927年
「日支児童の意志気質の比較」『満洲教育専門学校研究報告』第1輯 1927年
「日支児童及び青年の心理的的研究」『満洲教育専門学校研究報告』第8輯 1929年
「日支児童の心理的的研究」『日本心理学学会第2回大会報告』心理学論文集Ⅱ 1929年
岩波書店 pp.176-183
「満洲教育専門学校研究報告」にみられる日本与中国の児童・青年を対象とした知能や意志気質のテスト調査研究がここでは注目に値する。朝日としてはそれまで、「満洲」とは何ら関係のない研究論文を発表していたのが、ここではじめて任地に即した研究をはじめる。これ以前にも、知能検査やたとえば計算能力テストなどを学校現場の教師が実施したことはあったが、在校心理学者が実施したこの種の調査はほとんどはじめてとしている。これについては後の機会にとりあげたい。

6. 満洲医科大学と黒田源次たち

満鉄は関東軍の認可を受け、1911（明治44）年6月南満医学堂の事務を奉天附属地大連合院奉天分院内に開始した。同年8月に南満医学堂は専門学校令による専門学校と定められ、10月には本科生日本および予科生中国人の入学者に授業が始まった。これが後の
満洲医科大学のもとになる。1922（大正11）年5月、満洲医科大学の設立が認可され、同時に予科・別科・南滿医学堂を併設していた。予科は日本語授業についていない中国人学生のための日本語等の授業を授けるのでのコースであったが、その後学部進学課程の機能をあわせもつようになった。修了後本科に進学するかたちとされていた。1924（大正13）年には大学予科附属予備科に中国人女子の入学を認めるようになり、同年南満医学堂生徒の募集を停止する。別科はのち専門部と改称し、中国人生徒を入学させた。それとは別に薬学専門部もおかれた。中国人女子が行かれるのはこの専門部までだった。学部卒業生にはさらに大学院専修科、および研究科にすむ道がひらけていた。他に満洲医科大学病院看護婦養成所も附属していた。

教室は、解剖学、生理学、医学、病理学、薬物学、微生物学、衛生学、法医学、内科学、外科学、小児科学、精神病学、眼科学、産婦人科学、耳鼻咽喉科学、皮膚泌尿器科学、歯科、理学療法科、東亜医学研究所、栄養科、と分かれ、他に予科、専門部、薬学専門部等をもち、200人を越える教職員を擁していた。

1939（昭和13）年8月の『満洲医科大学一覧』によれば、そのなかで、黒田源次は生理学教室の筆頭教授であるときに東亜医学研究所長を、さらに専門部教授も兼ねている。長谷川和美は予科教授として、心理学とドイツ語および修身を担当し、専門部講師も兼任している。また、のちに満洲心理学会会員に名を連ねる大林恵美四郎が薬学士として1925（大正14）年3月10日から1928（昭和3）年4月1日まで予科助教授に在職していたことを、旧職員名簿のなかに拾うことができる。

他に京都帝大の心理を1936（昭和11）年に卒業した阿部善四郎が、九大医学院を退学して1939（昭和12）年から2年ほど満洲医大の生理学教室、つまり黑田の下で助手をしていた。その後、武内隆哉が在籍している。

大林恵美四郎についてであるが、1893（明治26）年3月熊本県天草に生まれ、1921（大正10）年広島高等師範学校教育科を卒業し、豊高等学校に勤めた後、1925（大正14）年満鉄に入社している。大一覧にあったように薬学士をいつ取得したのか、あるいは何かのまちがいか定かでない。満洲医大を辞めてから、撫順女子教諭、安东大和尋常小学校長、安東青年訓練所主事、海鷹浜尋常高等学校長、海鷹浜尾崎尋常小学校長を歴任し、1939（昭和14）年5月から牡丹江青年学校長を務めている。また、『南満教育』（第32号～第62号、1926年）に「学校療育の目標並びに取扱上の研究（1）～（3）」などを書いている。経歴等から推察すると薬学士という方が何かの誤りではないかと思われる。

1908（明治41）年2月に鳥取県に生まれた長谷川和美は、1931（昭和6）年京都帝大哲学科を卒業し、同大学院にて研究を重ねた後、1933（昭和8）年には東亜薬学協会京都在所に勤務することでキリスト者として出発する。満洲医大予科教授として赴任するのは1936（昭和11）年4月であった。そこでどのような活動をしたか詳らかではない。なかに志学会の発起人に名を連ねていることと、「徳性に於ける東洋的と西洋的」（『満鉄教育たより』第33号、1937年5月15日 pp.1-5）という論文にうかがい知ることができる。志学会とは、精神文化（倫理、宗教、哲学、教育、史学、文芸）の研究による人格の修養を目的として同志を募集1926（昭和11）年8月に発足したものです、滿洲医大、奉天一中、奉天朝日高女、奉天図書館、教育研究所などから1、2人の有志が発起人になった研究座
満洲における心理学
—前半期における人物を中心として—

談会的のものである。発起人のなかには他に済鉄教育研究所の石川七五三二も含まれており、石川の「在満児童の心理的特性の要約」の報告や黒田源次の「鶴の習性の発達」の講演、「長谷川の「満洲飲食の習俗について」」の講演、国立博物館で開催中の東洋古地図展覧会を黒田の説明で参観するなどの活動が行われていた。

黒田源次の講演については少し詳しく触れおくべきだろう。彼は1886（明治19）年12月4日熊本県原馬家に生まれ、後に黒田家の養子になったことで改姓している。1911（明治44）年京都帝国大学文学部哲学科心理学専攻を卒業した。卒業論文は「出法の実験批判」であった。卒業とともに同大学院に「明日本」という課程を設けて進学し、医学部の石川日出鶴丸教授の指導のもとに生理学教室に籍を置いた。そして出発して当時日本ではまだ取りあげる人のはほとんどなかった条件反射法についてむことになる。1914（大正3）年京都大学医学部附手に、1920（大正9）年には同医学部講師になっている。この間1919（大正8）年から2級上の千葉鶴夫、浦本政三郎とともに「心理学雑誌」（京大刊）を創刊、編集を担当する。1922（大正11）年には「視覚実験の研究」で文学博士号をとったが、1924（大正13）年から1年間文部省の留学生としてドイツにわたり、日独文化協会Jaharischew Institut初代所長としてベルリンに駐在した。1926（大正15）年5月、満洲医科大学教授として奉天に赴任し、生理学第一講座を担当することになる。1929（昭和4）年彼は満洲医大に東亜医学研究室を創設する。1931（昭和6）年から翌年になって再びヨーロッパに留学。1939（昭和14）年以降同大図書館長、医学研究部長、予科学栄、東亜医学研究所長、大評議員を歴任する。戦後1947（昭和22）年に東京国立博物館陳列品課警务に、1952（昭和27）年には奈良国立博物館の初代館長兼正倉院評議員を務めている。1957（昭和32）年1月13日、骨髄炎のため逝去。享年70歳であった。

心理学者としては特に後の異色の経歴かもしれないが、研究領域、従って研究業績は心理学はもちろん医学、古代文化、初期洋画、中国美術等にわたり、きわめて広かった。心理学関係の著書は

『条件反射論—意識生活の生理学的解釈』1924年 生田書店
『心理学の諸問題』1924年 寛文館 があり、

他に、視覚実験に関するものをはじめとして論文が多数ある。また医学関係のものもこれまた多数残している。「東亜医学研究所は東方医学を主体とする東亜医学の研究並びに東亜に於ける医学に関する諸事情の調査研究を目的とし、大正15年黒田生理学教授主宰の下に中国医学研究所の名をもって創設され、昭和12年現在の名称に改められたものであるが、その今日までの業績の主たるものは、文献の蒐集とその整理、古医書に関する書志学的研究、漢方の薬方の研究、漢薬の調査並びに研究、その他等である」とされている。そこで黒田の関わったものとして、たとえば、『満洲医科大学業績集』第1輯（昭和9—13年）の「8 東亜医学」18）によれば、

『中国医学書目』（岡西為人と）1931年
『東亜医学の研究に就いて』満洲医学会写真（講演）1935年
『宋以前医籍考（第1輯 内経、運氣）（日名静一・岡西為人と）1936年
『宋以前医籍考（第2輯 脈経、難経）（日名静一・岡西為人と）1939年
『靈枢経に就いて』『支那学』第7巻 第4号 1934年

18）「満洲医科大学業績集」第1輯（昭和9—13年）の「8 東亜医学」に著者名が挙げられている。
「医薬としての丹」（英文）『石川教育還暦記念論文集』1938年
「丹薬」『東亜医学研究』第2輯 1939年
「蒙古藥方」『東亜医学研究』第2輯 1939年
「シイボルト先生の元治元年記日」『シイボルト記念講演集』1935年
「シイボルト先生とその門人」『長崎談論』第17輯 1935年
「仏典に現れたら医薬」『国民医学』第15巻 第11号 1938年
などが列挙されている。
また、「西洋画の影響を受けた日本画」（1928年）、『上方絵一覧』（1929年）、『長崎系洋画』（1932年）などの美術関係のものも多数ある。さらに阿部孫四郎19）によると、奈良心理学会で部分的に紹介された「気の研究」は未完ながら中国文化心理学として貴重なものであったようである。
きわめて博学多才である。文化についても幅広く深い造詣をもつこのような人物が、立ち会ったであろう当時の満洲医大やそれらをとりまく民族問題の現実から、人として何を感じていたか切に知りたいところであるが、それを拾うことはむずかしい。
奉天第一中学の3年生であった野村章は1940年秋、兄の在学する満州医科大学恒例の大学祭を見物に行き、開放されていた標本室を見てまわって、膨大な量の人体標本に懸念したこと書きている。
「そこにはありとあらゆる人体の部分から完全な焼死体までが陳列されていました。全部見おわるまで半日かかるほどでした。ホルマリン漬けの頭部標本の右半分には生前の顔が残っていました。ある室では胴体が厚さ10センチほどの輪切りにされ、それを立てて上から順に断面を観察できるように並べてありました。標本に訪れた人びとに親も兄弟もあったことでしょう。しかしこれは人間が物体としてしか扱われていない不気味な世界でしかありません。恐ろしい体験でした」と20）野村も、戦後に国際法違反の残酷な人間実験をやっていた「七三一部隊」が奉天から北北東約500キロのハルビン郊外にあり、満州医学教授北野政次が数年間その部隊長をしていたことを思っている。その北野は微生物学教室の筆頭教授であり、専門部教授として黒田と名を連ねている。

7. その他の機関と人たち

（1）満洲工業専門学校と経済

満鉄が高等教育の学校として満洲医大ならんで大西にしていた満洲工業専門学校には、経済が1932（昭和7）年から1934（昭和9）年まで教授の任にあった。彼は1897（明治30）年11月28日香川県に生まれ、師範学校卒業後、小学校に勤務しながら文検に合格し、上京して英語学校に学んでいる。さらに府島文理大学に来て、卒業と同時に渡邉している。1934年には宮崎県立大学教授として日本に戻り、大分県高鍋高女校長、小林高女校長、宮崎県立早川高女校長などを経て、戦後は宮崎県立和泊農科大学理事長から宮崎大学文学学部教授になっている。1963（昭和38）年同大学定年退職後は宮崎女子短期大学学長に転じ、1977（昭和52）年3月11日逝去。享年69歳であった。在満中の研究業績としては、調査を実施した「満州国」児童の在籍する大連市某公学堂の日本語教師であった古市賢三郎との共著で。
「満洲における心理学」
一前半期における人物を中心として一

「日満児童の列国観」(1934 『応用心理研究』第3巻第1号 pp.93-116)を残している。

(2) 満鉄大連図書館と柿沼

満鉄にとっての図書館の位置については先にふれたが、その図書館はそもそも満鉄設立の翌1907年10月に大連本社の一室で開始されたものだった。社会事業のひとつとして1910年に図書館事業を独立させ、沿線附属地に次々に設置していき、1934年にはその数23館、分館6までのにぼった。1918年1月の調査部の機構改革以降大きく発展してきた。柿沼が渡満するのはこの時期であった。

柿沼は1884（明治17）年に生まれ、1911（明治44）年に東京帝国大学心理を「気質の研究」と題する論文を書いて卒業する。東京市立日比谷図書館に勤務していたが、前述したとおり満鉄図書館の拡充整備をはかっていた島村孝三郎に誘われて1919（大正8）年に満鉄大連図書館に入社。1926（昭和元）年に大連図書館長になり、以来1940（昭和15）年5月に満鉄を退職するまでずっとその任にあった。同年6月には満州国立中央図書館盧溝橋事変となると洋書の収集にあたり、1943（昭和38）年に満鉄大連図書館顧問に復帰、敗戦後、大連図書館が中国蘭春鉄路公司に接収され、科学研究所中央図書館と改称されると同館の館長を1948年まで務めた。引き続きのための目録作成と事後処理のためであったという。帰国後は国立国会図書館で講演録索引の基礎をつくり、1960年から1971年まで、上海にあった東亜図書館の監督を務め、1971（昭和46）年に87歳で逝去している。そのほとんどを図書館畑を歩ってきた柿沼は「資料以外に興味がない人といわれ、戦後もずっと「自らが植民地の図書館を担ったという反省はなく「誇念かそれとも無邪気なのか」と評されている。」

たしかに図書にしか関心がなく、その論文もほとんどが文献解釈と収集した資料の紹介、書評、それに図書館の紹介に終始している。他方、柿沼は満鉄図書館が作成した総合目録が閲覧の動機に貢献したという理由で叙勲者のなかに加えられたが辞退するという行動に出たり、一高時代の後輩が図書館の本を利用して「満洲事変」という本を書き、柿沼にその序文を依頼していき、彼は「軍のお先棒を持く本の序文をお断りする」と拒絶したというエピソードが残っている。総川武治が大川周明らと共に右翼運動に進出したのと比べ、あの時代のなか「良心的な部類だったともいえよう。しかし時代はそんな「良心」を薄荷しなければ。たとえば1932年「満洲国」は各地の文化機関に「現存の各書籍中、満洲国の国情にあわないものは凡て焼き棄てる」という通告を出し、3月から7月末までのあいだに650万点余の書物を焼き、これに少しでも異議を唱える者は弾圧を加えたという。そのような現実を知らないのですまさせられたはずはない。それにかかわらず、戦後もその時代とそれへの自分の思いに一切ふれることはなく、大連図書館長時代と全く変わらず「本の虫」の生涯を送った。

柿沼は心理学畑を歩いたのでこそなかったが、その姿勢はむしろ比較的多くの心理学者たちに通じるある種の典型を示しているように思われる。都合の悪い状況をできる限りかかわれことを避け、そのためにむしろ「研究」のなかに没頭していくというスタンスである。特に心理学という抽象性をもった分野であることがそれを許していたことは容易に想像される。
おわりに

ここでは、心理学関係者が渡海し始めた前半期に焦點をあてて、関係者を洗い出すこととその所属機関の性格と人物の歴史を中心に調査してきた。まず心理学関係者たちはそのほとんどが教育関係の機関に所属し、高等ないことは中等教育および研究に従事した。所属機関とその関係は「満洲」社会の植民地化の変化を反映して変容してきた。1925年までは昭和になる以前は、どちらかというと理論的な、そして「満洲」としての特徴をとくにもつことのない研究多かったが、昭和に入ってから「満洲」に在住している子どもたちを対象としての調整研究がなされてきた。それは智能検査を中心として、性格検査や意識調査も含まれていた。これららの研究についての詳しい分析は今後の検討事項であると同時に、また後半期、特に建國大学の心理学者たちとその人たちによって結成された満洲心理学会を中心とした動向についての検討も今後の課題としたい。

註
1）野村章「序にかえて」「満洲・満洲国」教育史研究に携わってきた」野村章先生追悼集編纂委員会編「満洲・満洲国」教育史研究序説1995 エムティ出版 p.16
2）小林孝夫「満鉄一「知の軍団」の誕生と死」1996 吉川弘文館 p.17
3）勝部「日本におけるファシズムの進展が（Ⅰ）準備期、大正末期の運動の展開→民団→右翼の赤化防止運動。（Ⅱ）成熟期、（Ⅲ）前期）昭和27年→満洲事変→五・一五事件、（2）昭和36年→二・二六事件→日本親日運動。2）昭和39年→日中戦争。3）昭和40年→朝鮮統治体制。」1963 岩波講座『日本近代史』第11期 現代（4）1963 p.118
4）「会員名簿」満洲心理学会『第一屆全体研究発表会報告』康徳9（1942）年10月を中心に、昭和32年「日本心理学会会員名簿」昭和35年度「応用心理学会 日本心理学者名簿」『満洲人名辞典』（日本図書センター、1989）（中西利八編 満蒙資料集写産版『満洲総督 満洲』第三版1940年の復刻：各種学会誌などによって補充した）
5）小林孝夫 前出 p.70
6）福富一郎「満鉄の教育施設」1920「学校教育」第7巻4冊（通巻81号）pp.61-64
7）権英武生「満鉄教育者たる「解説」「満洲国」教育史研究会監修『満洲国』教育資料集成II期 満鉄教育者たち3 昭和12年1月～11月最終号 1992 エムティ出版 p.6 参照
8）伊藤幸之輔は 1988（昭和23）年6月福井県に生まれ、1920（大正9）年京都帝国大学哲学科教育学専攻を卒業している。富山県鶴ヶ子中学校教諭、倉敷総合教化校および役職書、日本新日柄古校を経て、山梨学芸、三鶴学芸女学校各校務を歴任し、1923（大正12）年10月新潟に入社した。翌1924（大正13）年6月20日から教育研究所に移るが、同年9月満洲教育専門学校が設置されるときに、教育・倫理・研究を担当する教授に就任し、またその附属小学校長を兼務することになる。同専門学校が廃校になった1933年から1年間教育研究所の所長をつとめている。その後椎名高等女学校長等を歴任し、1936（昭和11）年擔順中学校長になる。1937年12月教育行政改正により満鉄退社後も、引き続き満鉄に在職している。少なくとも一時期、心理診断法の技術者を兼任した研究会において関心をもつ。心理学的志向性のある教育学者だったと考えられる。
9）秋山真造は 1984（昭和19）年4月に生まれ、1910（明治43）年東京高等師範学校を、また1919（大正8）年京都帝国大学教育学科を卒業し、山梨県師範学校を、東京府第二高等女学校教諭を経て、満鉄教育研究所講師、満洲国地方本務学務設計学任。欧米留学後、1937年11月には在満学校教育研究会代表を務めた。
10）権英武生「解説」「満洲国」教育史研究会監修『満洲・満洲国』教育資料集成8 学校要覧類II 1993 エムティ出版 p.4
11）福富一郎「同上」pp.63-64
心理学に於ける心理学
一前半期における人物を中心として

12) 八木泰治（教育研究会）「発刊に臨みて」「満鉄、教育たより」創刊号 1934（昭和9）年9月13日
p.1 『満鉄教育たより』第1巻 『満州国教育史研究会監修 『満州国教育資料集成』』 1992 エミテ出版

13) 岡野正「参考資料『四房幸三氏に聞く』」野村章先生遺稿編纂委員会編 『満洲、満洲国教育史研究序説』 1995 エミテ出版 p.111
四方幸三は満洲教育専門学校第三期生。京都師範学校を1926年卒業と同時に同校に入学した。
同期の入学者は、志願者626名中43名であった。毎年、同様の進度率であった。

14) 野村章「『満洲』における『新興教育』論者」野村章先生遺稿編纂委員会編 『満洲、満洲国教育史研究序説』 1995 エミテ出版 p.106
初出：「季刊 教育運動研究」第6号 1977

15) 朝日直樹「鉄道やの仕事と教育家の仕事—特別寄稿—」『満鉄教育たより』第16号 1935（昭和10）年12月15日
p.1

16) 朝日直樹「鉄道やの……筆者」仕事は実は面白かった。私の過去を通じて恐らくこれからはほど面白かったことはなかった。将来に於いてもそう度々あろうとは思われない」そして、その理由を教育界と比較して述べている。同上 p.1-2

17) 「満洲医科大学— （昭和13年4月）」『満洲国教育史研究会監修 『満洲国教育資料集成』』 第8巻 学校教育部1993 エミテ出版

18) 筆者は1999年秋中国東北を訪れる機会があり、瀋陽（旧奉天）の中国医科大学（旧満洲医科大学）を訪問した。当時のままだ残っている図書館の講堂、"1929"と建築落成時の大傘モザイクにうちこまれた本部事務所入り口等を見てまわった。その際に図書館の司書の方は探検した下さったのが、『満洲医科大学史記』であった。短い時間しかだったが、その際に親切な案内をしてくださった田中洋先生や司書の方々ならびにいとわず通訳と旅行案内の労をしてくださった天津師範大学の構築先生。この場を借りてお礼を述べたい。

19) 阿部隆四郎「故黒田源次博士追悼記」『心理学研究』第28巻 第1号 1957 p.57

20) 野村章 高等教育センターの少国民』岩波ブックレットNo.186 1991
野村章先生遺稿編纂委員会編 『満洲、満洲国教育史研究序説』 1995 エミテ出版に再録 p.146-147

21) 東條文規「図書館人の戦争責任意識—満洲に渡った三人の場合」ザ・ぽん編集委員会編 『図書館とメディアの本 ず・ぽん③』 1996 ポット出版 pp.20-31

Psychology in "Manchuria"

by Kuniko Koyano

To date, there has no psychological studies of the Japanese colony of "Manchuria". In this paper, I have intended to discuss the work of Japanese psychologists during that time. 1919 to 1935 is the approximate focal time period of this study.

Most of the psychologists in "Manchuria" during that time worked in colleges, professional schools, high schools and government offices of education. These institutions were changed during colonization. Psychologists of that time concentrated on the intellectual and mental faculties of Japanese, Chinese, Korean children since 1926 (the beginning of the Showa Period).

I give special mention to such psychologists of the time as Mr. Shimeji Ishikawa of The Mantetsu Educational Research Institute, Professor Naoki Asahi of The Professonal School of Education, Dr. Genji Kuroba of The Manchurian Medical College.

An analysis of subsequent psychological studies (1936-1945) will be treated in a later paper.